

「落語と私」 その七

三代目 橘ノ百圓

この原稿を書く前に、6月21日 第貳回「新木場寄席」には、大勢の方のご来場を頂き、心より篤くお礼を申し上げます。

五、鼻欲しい(鼻が欲しい)

何故扇馬師匠が、学生の私に、この噺を付けてくれたのかは、未だに謎です！？今では、この噺が高座に懸ったのを聴いた事が在りません。先ず、鼻の無い者が主人公です。マア身障者の噺ですから気を遣います。扇馬師匠も誰から教わったのか、私も覚えていません。六代目の圓生師が、これと似た「おかふい」を演ってましたから、圓生か圓馬だと思います。この鼻の部分と別と考えると、実に気の利いた面白い噺ですが、私もここ何十年と演っていませんネ。

「あらずじ」

昔は、吉原と言う大変結構なお遊び場所が有りまして、ここに足繁く通うと、男の勲章なんてエ事で、梅緩褒章なんてエものを貰いまして、これをウッチャッておきますと、鼻の先が欠けたんだそうで、そこでハナノサキガケと書いて、花魁と読ませると言う。誠に上手く字が宛がってございますが。から始まりです。サルお旗本、吉原通いの報いで鼻が欠けてしまい、將軍様へのご挨拶「お上には麗しきご拝顔の体を拝し奉り、恐悦至極に存じ上げ奉ります」が(おハミにはフルハシキごホン顔のヘイをファいしファてまつり、恐フェシフゴクに存じファゲ ハへまつりまフ)となってしまう始末、將軍様も耳障で在ると隠居をさせられてしまい、仕方無く子供を集めて素読の指南「山高きが故に尊とからず」が駄目(山ハハきがフェにファッとからず)これでは生徒も1人減り2人減り、自室に籠って悶々とする毎日、お内儀が出来た人で「お体に障ります故、川崎のお大師様にお詣りに行かれては」と勧められ、1人で外出する事になるが、途中馬子に、馬に乗ってくれと頼まれて、鮮やかに馬に乗り、対岸の房総半島の素晴らしい景色に観とれ、心和んでいると、馬子の頭の前が禿ていて、後に申し訳程度に鬘を着けているので「禿山の前に取柄(鳥居)は無けれども、後に一寸と髮(神)ぞまします」と狂歌を詠んだ。すると、この馬子が風流人で「返歌ぶっべか！？只、決して怒っては何ンねえぞ」「イヤ風流の道じゃ決して怒りはせぬ」(イヤ風流のミヒじゃ決して怒りはへぬ)すると馬子の返歌が「山々に名所古蹟は多けれど、花(鼻)の無いのが寂しかるらん」と来た「何、山々に名所古…鼻の無い、鼻の無い…」顔色が変わり急なご帰宅、これを見たご内儀が「如何なされました！？」と訊かれ、旅での経緯を話すと今度は、お内儀の顔が真青になり、長押に掛けて有った薙刀を小脇に抱え、主の敵をと飛び出そうとする処を、亭主は妻の着物の裾を押え「血相変えて何処に参る」(ケッホウ変えていづれにマヒル)「何処に参るは知れた事、てにをはの無い戯れ歌に、鼻の無いとの悪口過言。まだ遠くへは行くまいに、馬子の後追いかけて、貴方のご無念晴す所存」「行くまいぞ！行くまいぞ、雉子も鳴かすは撃たれもすまい。狂歌も詠ねば返歌もすまい。エエ行くまいぞ」(いづれに参るは知れた事、てにをはの無い戯れ歌に、鼻の無いとの悪口過言。まだ遠くへは行くまいに、馬子の後追いかけて、貴方のご無念晴す所存)「行くまいぞ！行くまいぞ、雉子も鳴かすは撃たれもすまい。狂歌も詠ねば返歌もすまい。エエ行くまいぞ」(いづれに参るは知れた事、てにをはの無い戯れ歌に、鼻の無いとの悪口過言。まだ遠くへは行くまいに、馬子の後追いかけて、貴方のご無念晴す所存)

ン歌もフまい。いづまいぞ)「じゃと言うて」「行くなと申すに」(いづなと申フに)

「チェー口惜うございます」「何、そちゃ口惜しいか!?私しゃ鼻が欲しい」この辺は全て芝居懸りになります。皆さんも、聴いた事の無い噺だと思いますが、やはり、現在の高座は無理ですかネ。

「扇馬師匠の説明」

「この噺は汚い処が在るから、品良く演る様に、特に鼻に障子が抜けている旗本が喋る時は、無理に笑いを取りに行くナ!」と言われました。又、馬上の侍と馬子の会話は、ノンビリと。対岸の房総半島の景色は、それらしく大きく、目を遠くに向ける様にとも教りました。後半の芝居懸りの仕草は、お内儀は立膝になるので形良く、シッカリ腰を落着けて遣れとの事で、亭主旗本との遣り取りが難しいです。

六、青菜

これは大阪根多です。丁度今頃の季節の噺です。やはり、代表的なのは五代目小さん師匠だと思えますが、扇馬師匠は、小金治さんからだと聞いてます。噺の筋は同じですが、仕草など細かな処が違います。季節の噺ですから、5、6、7月頃に多く高座に懸りますネ。この青菜はどの様な菜ですか?と訊かれた噺家が「噺が面白ければ、そんな事アどうでも良いんだ」と答えたそうです。そうですネ、それが主眼では無いですから、聴き手の皆さんの想像にお任せします。

「あらすじ」

出入りの大家の庭を手入れに来た一人親方の植木屋さん、昼過ぎに一服している所に、その家のご主人が「植木屋さん、ご精が出ますナ」と植木屋さんとの遣り取り、「どうです、大阪の友人が送って来た柳影が有るが、一緒に一杯飲みませんか!」そこで鯉の洗などを肴に“なおし”を飲んでいると、ご主人が「植木屋さん、菜のオヒタシは好きかな?」「エ、大好きで」「では、これに取り寄せましょう、奥や、植木屋さんが菜のオヒタシが好物なので、鰹節を沢山掛けて持って来ておやり」「旦那様」「ウン何ンぞしたか?」「鞍馬より牛若丸が出まして、その名を九郎判官」「ア、そうか、では義経にしておきなさい。済んな植木屋さん、菜は食べて仕舞って無いそうだ」これが、この家の隠し言葉だと言われた植木屋さんが帰り道「ア、その菜を食って仕舞ったから『その名をクロウ判官』か『デッ、旦那が止しとけテエのを義経にしておけ』実に上手ネどうも」としきりに感心して家に帰り、カミさんに「お前にこんな事が言えるか?」と言うと「そのくらいの事ア私にだって言えるヨ」丁度そこに湯を誘いに来た半公に、酒と鯛の塩焼をご馳走して、半公に向って「植木屋さん菜は好きかな!」と訊くと「俺ア菜は大嫌エだ」と断われ、無理やり「出さねエから、好きだと言ってくれ」と頼みこんで「奥や、植木屋さんが菜のオヒタシが好きだそうだから、出しておやり」と、その家のオカミさんが「鞍馬より牛若丸が出まして、その名を九郎判官義経」「エッ!義経、じゃあ弁慶にしておけ」実に馬鹿バカしい楽しい噺です。※ 鸚鵡返しおうちの代表みたいな噺です。

「扇馬師匠の説明」

大家の旦那は、この庭を1人の植木屋さんに任せていて、毎日毎日手入れをして丁度1年ほど掛る庭の広さだと言われ、その時分には想像が付きませんでした。大分昔になりますが、屋根屋さんの材料を納入の時に、正に「これだ!」の広さの庭に出会いました。扇馬師匠からも、庭の広さは、目の遣い方だから、高さ広さを頭の中で描けなければ、この噺は死ぬヨと言われたのが印象的です。大家の旦那の品の良さと鷹揚な仕草、又、奥様の綺麗で淑やかな身のこなし、それと正反対の植木屋夫婦の会話とガ

サツな振る舞い、この辺が大事だヨ、でも、植木屋夫婦は、^{たいけ}大家の真似を楽しんで、^ま真剣に演っているのだから、そこを忘れない様に、とも教わりました。

「落語豆知識」

※「^{おうむがえ}鸚鵡返し」

又、規定枚数を超してしまいました。次回は、この「落語豆知識」から始めたいと思います。



桂離宮・中島

出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>